

## 6-6 島原半島およびその周辺域の最近の地震活動 (1986年5月～1986年10月)

Recent Seismic Activity in and around the Shimabara Peninsula  
(May, 1986 - October, 1986)

九州大学 理学部  
Faculty of Science, Kyushu University

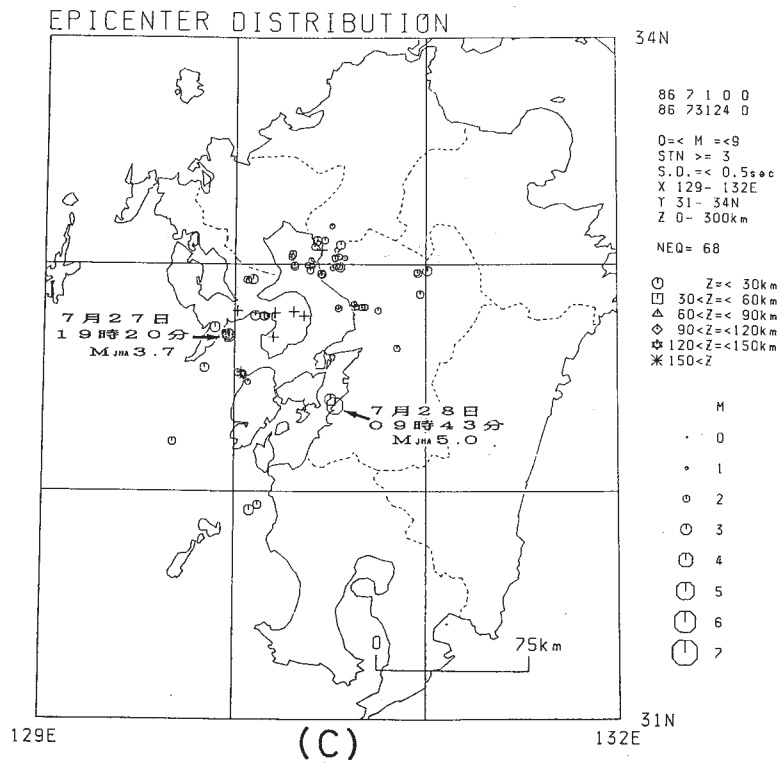
1986年5月～1986年10月の月別震央分布を第1図(A)～(F)に示す。1984年8月には千々石湾においてM5.7を最大地震とする群発地震が発生したが、その後活動は低下し、現在ではむしろ群発活動域の周辺部が活発化している。7月27日19時20分M3.7の天草灘・千々石湾会合部の地震は長崎市で有感であり、8月17日11時38分M3.7の有明海の地震は、島原市東方沖の地震としては1977年以降最大級であった。また、10月23日13時00分には諫早市付近でM3.8の地震が発生している。

第2図(A)、(B)はそれぞれ、1986年5月～7月、1986年8月～10月の各3ヶ月間の震央分布である。第2図には、従来から指摘されているように、別府-島原地溝帯に沿うほぼ東西の浅発地震活動の分布と、天草灘地溝内の北東-南西方向の分布がみとめられる。また、天草灘地溝の活動域をそのまま北東方向に延長した有明海北部にも、かなり活発な浅発地震活動域がある。さらに、震源決定される地震数が少ないため明瞭ではないが、阿蘇南から八代海に至る日奈久断系に沿う北東-南西方向の分布もみられる。

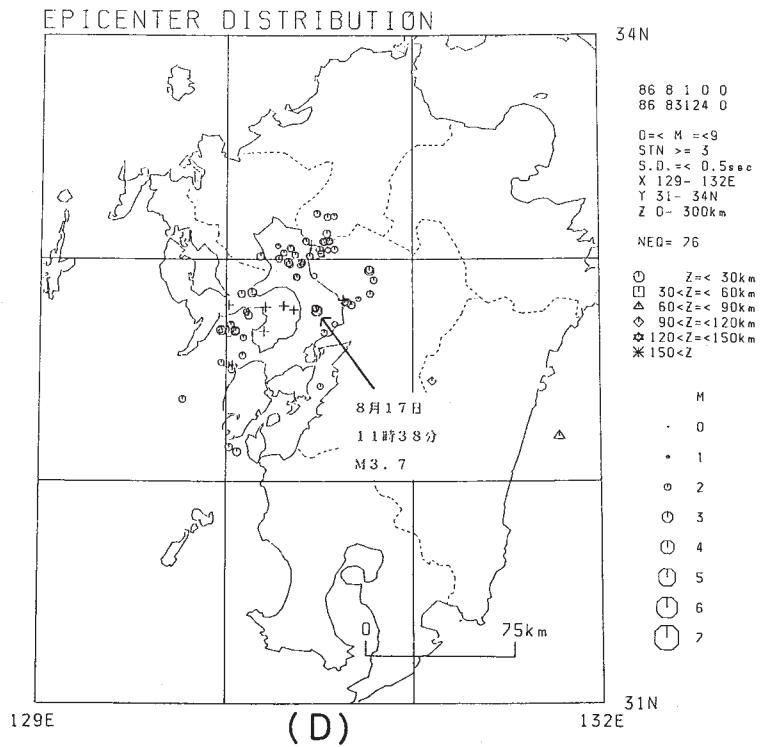
第4図は、島原半島周辺に発生した主な地震の発震機構を示したものである。得られた発震機構解のほとんどは南北方向の張力軸を有する。このことは、島原半島周辺が南北張力の応力場にあるとする考えを支持する。ただし、雲仙地溝周辺は正断層型が卓越しているのに対し、天草灘地溝との会合部では横ずれ成分が大きくなっている。これらの発震機構は、地溝帯の活動様式を明らかにするうえで基礎となるものであり、データの蓄積を待ってさらに詳しく調べる必要がある。

(島原地震火山観測所)



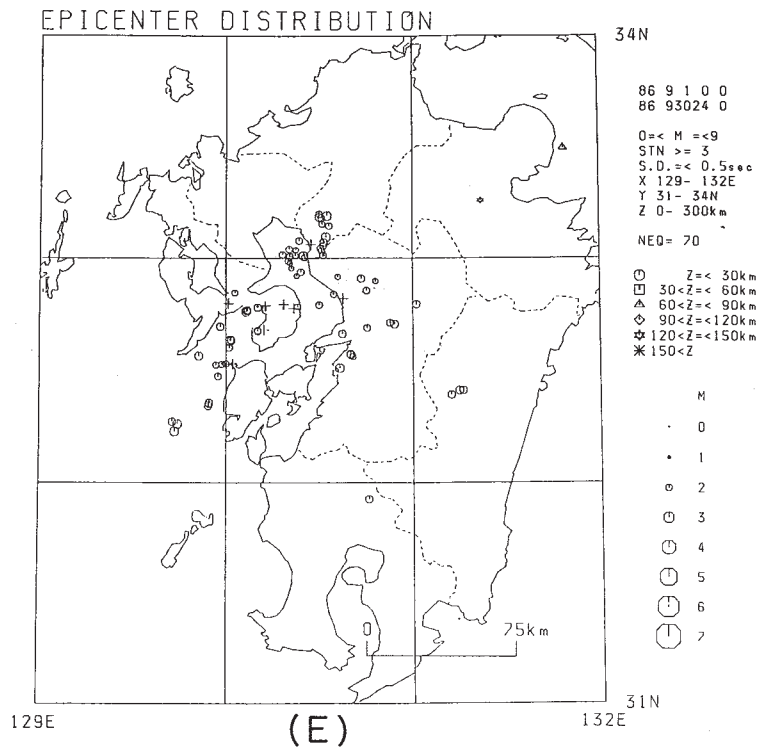


(C) 1986年7月  
July, 1986.

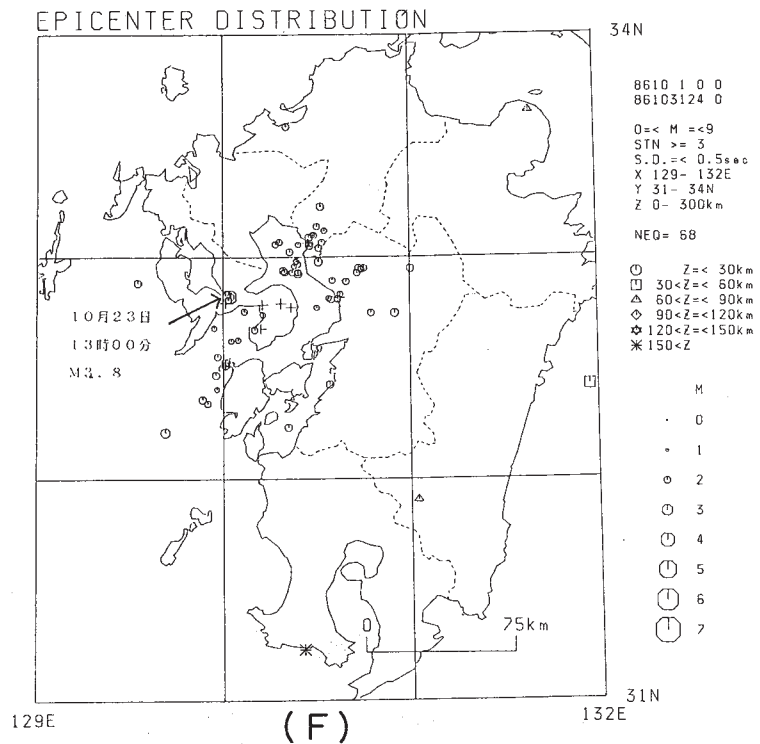


(D) 1986年8月  
August, 1986.

第1図 つづき  
Fig.1 (Continued)

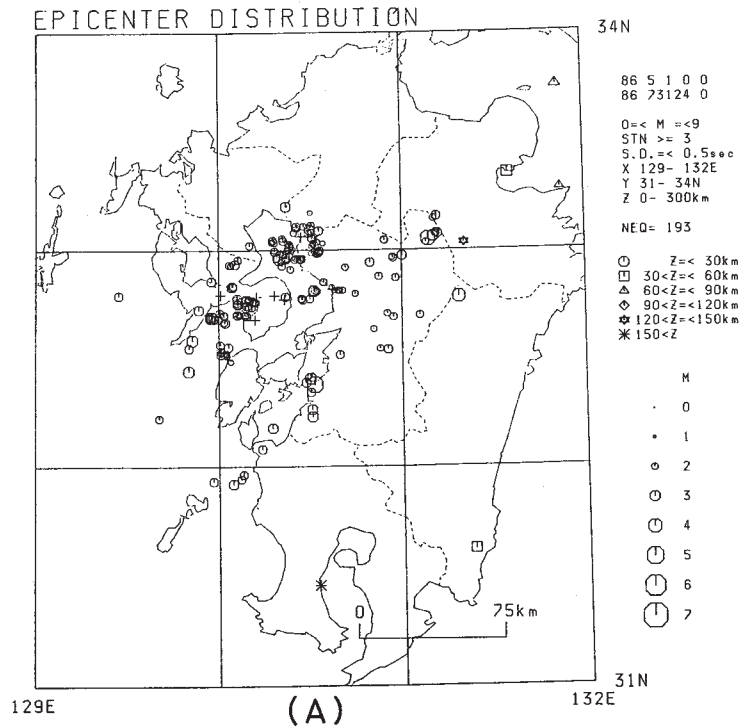


(E) 1986年9月  
September, 1986.

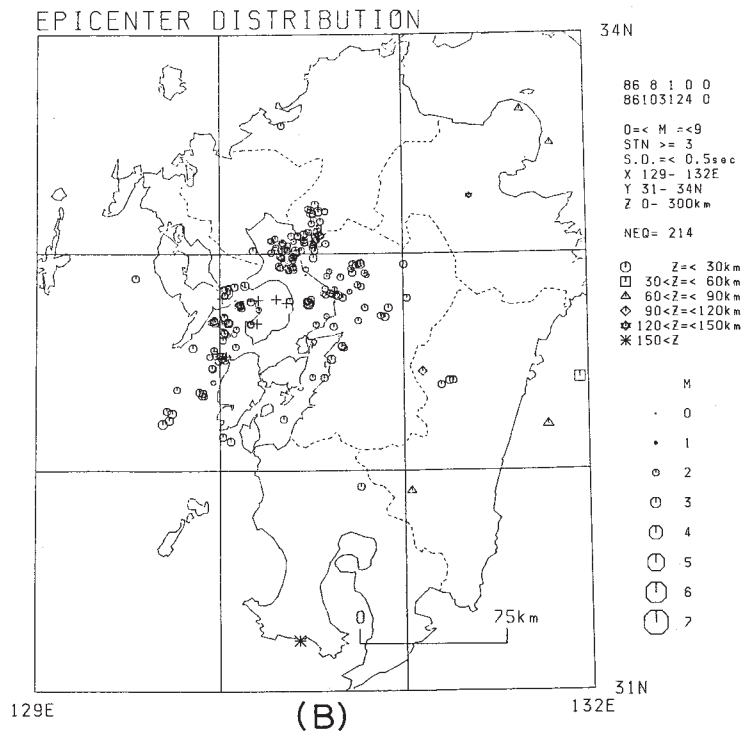


(F) 1986年10月  
October, 1986.

第1図 つづき  
Fig.1 (Continued)



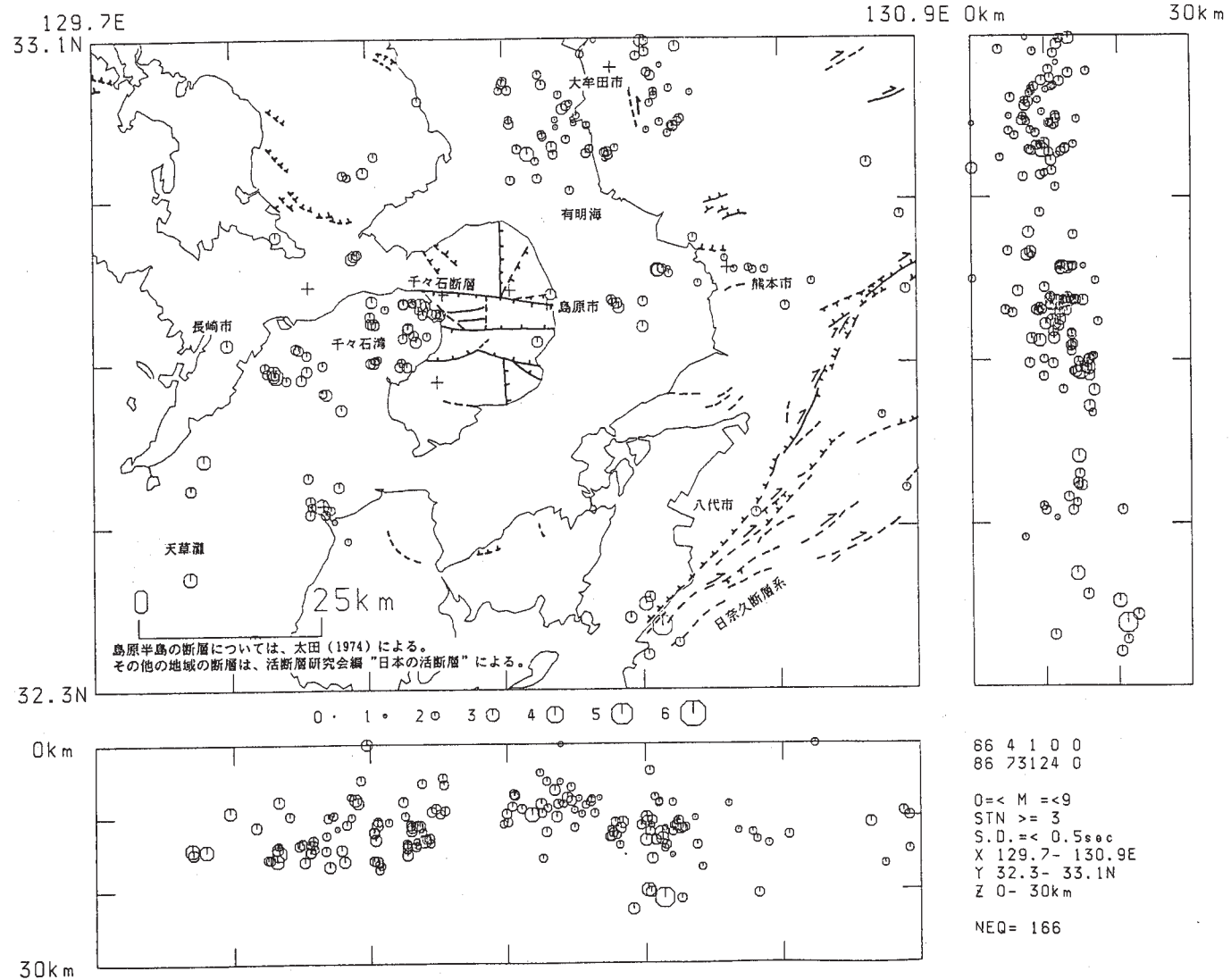
(A) 1986年5月 - 1986年7月  
May, 1986-July, 1986.



(B) 1986年8月 - 1986年10月  
August, 1986 - October, 1986.

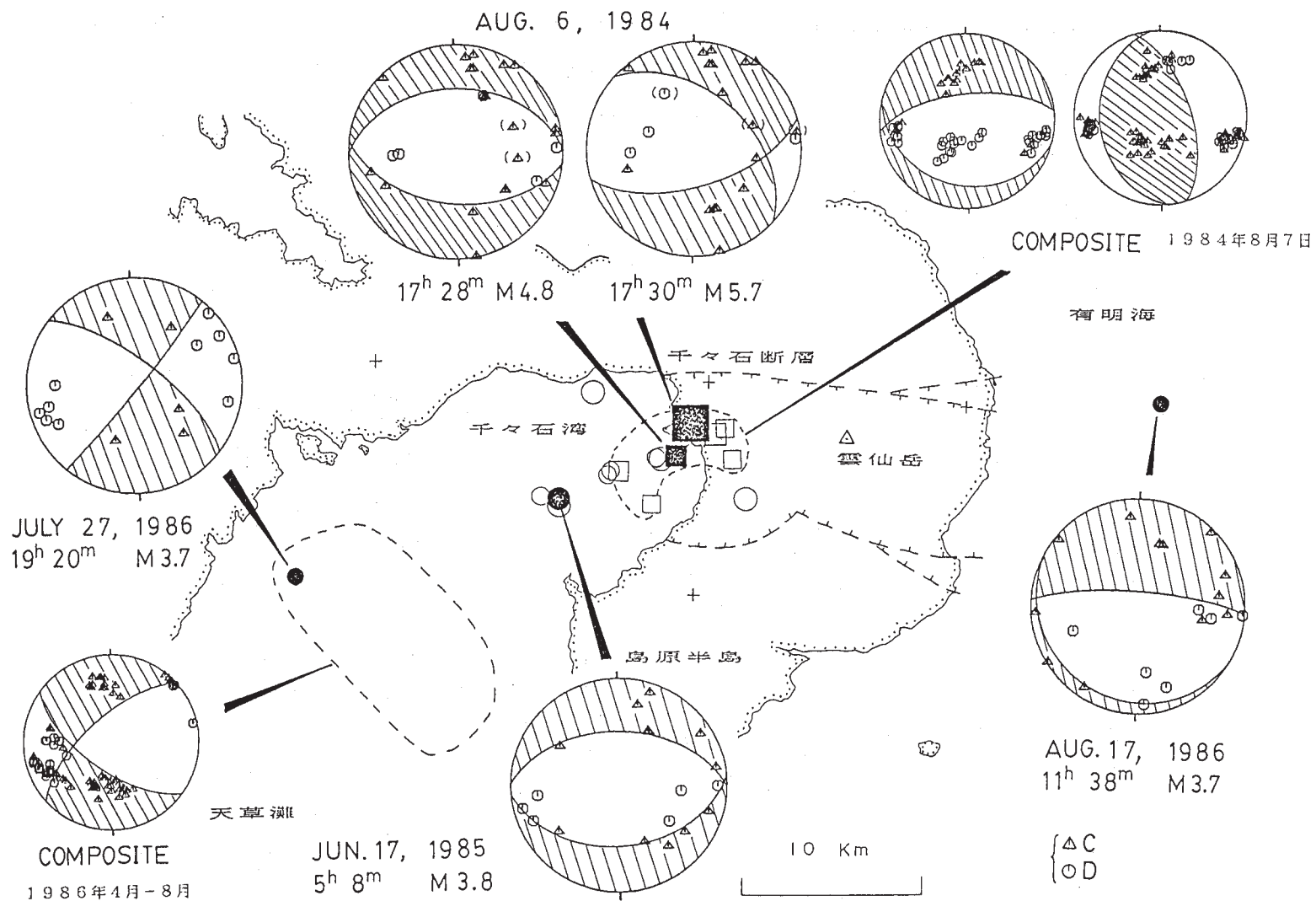
第2図 九州中部の地震の震央分布

Fig. 2 Epicenter distribution of earthquakes in the middle part of Kyushu.



第3図 島原半島及びその周辺の地震活動(1986年4月-1986年7月)と活断層分布

Fig. 3 Distributions of hypocenters and active faults in and around the Shimabara Peninsula (April, 1986 - July, 1986).



第4図 島原半島及びその周辺に発生した主な地震の発震機構（1984年8月 - 1986年8月）下半球等積投影

Fig. 4 Focal mechanisms of several earthquakes in and around the Shimabara Peninsula (August, 1984 - August, 1986). Solutions are represented by equal area projection on the lower focal hemisphere.